

### カタストロフからの哲学

ジャン・ピエール・デュビュイをめぐって

「カタストロフ」という言葉は、意訳される発想だが、を越え予測不能で不可避的な災厄を指す語が世界中で流通するようになったのは、デュビュイ（1941）の思想的な事象が日常化した現実を反映しているからだろうが、本書を一読して思い出したのはもう十数年前の二〇〇三年冬、パリ郊外のメトロの車内でまったく未知の女性から突然「あなたを『聖なるもの』の刻印をすか？」と真顔で尋ねられたという、ごく私的な出来事だった。あまりにも唐突なので驚いたが、一瞬間を思い出して「世界の終わりのことかな」と問い返したのには、ヴィリリオの企画による大事故や大災害の記録とそれらをもモチーフにした現代アート（「美術展」）「Ce qui arrive」を見た直後だったせいかもしれない。そんなカタストロフの時代を予告するかのようには、ボードリヤールが「世界は錯乱的な状況に陥っているのだから、われわれも錯乱的なものを見かたにむかわなくてはならない」（『透きとおった悪』）と書いたのは、もう四半世紀も前のことだ。

「認識論」をめぐって「不確実性に限定されるリスク論を超えて」「存在論的不確実性に踏みこむカタストロフ論がすでに提案されていた経緯を（『破局』と訳されること多い）「カタストロフ」の多義性を確認しつつ）要約する。その上で、（起源から終末へとむかうリアリティ）「歴史の時間」にこだわる「運命論的カタストロフ論」ではなく、（時間軸上の未来とい

もの刻印」を中心に読み直し、彼の破局論が合理主義的経済至上主義を前提とする「予防原則の理論」を批判の対象としていたことが、この「破局」を指摘してからの、ドレフュグが、このような未来観は西ケムの議論やスタイロンの小説『ソフィアの選択』（アウシュヴィッツで息子を助けるという過酷な選択を強制された母親の物語で映画化された）などに「性的」の限界を告知する思想的試みでもあるだろう。

第二部で、中村はデュビュイの思想形成の根底に「リッチ（文明批評）、フォーン・フェルスター（システム論）、シラール（人類学）」に定めることへの否であるという（二）組みを読み取った上で、システム論を中心にデュビュイの破局論を「ありえないこと」を「中心に論じて、デュビュイが過去ではなくて未来を留保する自己限定の知恵（西谷）につながる真摯な企てとなっている」と述べている。

昨年秋来日したフランスの著名な歴史家「シラール・ヴィノックは、現代フランス思想に於いて、サルトルやフーコーのような大思想家やベルナルド・リヴィエラ、メデア知識人と

★となく、よつて氏は慶應義塾大学専任講師・フランス哲学・社会思想専攻。パリ第七大学博士課程終了。共著に「顔とその彼方」「全体性と無限」の「プリズム」など。一九八〇年生。

★もりもと・よつすけ氏は東京大学准教授・表象文化論専攻。東京大学大学院博士課程単位取得退学。著訳書に「ジャン・ピエール・デュビュイ」「経済の未来」など。一九七六年生。

## 終末論的ニヒリズムを越えて

現実を冷静に受け止めようとする  
意思を明確に表明した著作

塚原史



カタストロフからの哲学  
著者：ジャン・ピエール・デュビュイ  
訳者：塚原史  
科学と哲学を生存に埋め戻す  
四六判・198頁・2200円  
以文社  
978-4-7531-0327-0  
TEL. 03-6272-6536

「カタストロフ」という言葉は、意訳される発想だが、を越え予測不能で不可避的な災厄を指す語が世界中で流通するようになったのは、デュビュイ（1941）の思想的な事象が日常化した現実を反映しているからだろうが、本書を一読して思い出したのはもう十数年前の二〇〇三年冬、パリ郊外のメトロの車内でまったく未知の女性から突然「あなたを『聖なるもの』の刻印をすか？」と真顔で尋ねられたという、ごく私的な出来事だった。あまりにも唐突なので驚いたが、一瞬間を思い出して「世界の終わりのことかな」と問い返したのには、ヴィリリオの企画による大事故や大災害の記録とそれらをもモチーフにした現代アート（「美術展」）「Ce qui arrive」を見た直後だったせいかもしれない。そんなカタストロフの時代を予告するかのようには、ボードリヤールが「世界は錯乱的な状況に陥っているのだから、われわれも錯乱的なものを見かたにむかわなくてはならない」（『透きとおった悪』）と書いたのは、もう四半世紀も前のことだ。

本書「カタストロフからの哲学」は、そうした終末論的ニヒリズム（主観的に

「不確実性に限定されるリスク論を超えて」「存在論的不確実性に踏みこむカタストロフ論がすでに提案されていた経緯を（『破局』と訳されること多い）「カタストロフ」の多義性を確認しつつ）要約する。その上で、（起源から終末へとむかうリアリティ）「歴史の時間」にこだわる「運命論的カタストロフ論」ではなく、（時間軸上の未来とい

もの刻印」を中心に読み直し、彼の破局論が合理主義的経済至上主義を前提とする「予防原則の理論」を批判の対象としていたことが、この「破局」を指摘してからの、ドレフュグが、このような未来観は西ケムの議論やスタイロンの小説『ソフィアの選択』（アウシュヴィッツで息子を助けるという過酷な選択を強制された母親の物語で映画化された）などに「性的」の限界を告知する思想的試みでもあるだろう。

第二部で、中村はデュビュイの思想形成の根底に「リッチ（文明批評）、フォーン・フェルスター（システム論）、シラール（人類学）」に定めることへの否であるという（二）組みを読み取った上で、システム論を中心にデュビュイの破局論を「ありえないこと」を「中心に論じて、デュビュイが過去ではなくて未来を留保する自己限定の知恵（西谷）につながる真摯な企てとなっている」と述べている。

昨年秋来日したフランスの著名な歴史家「シラール・ヴィノックは、現代フランス思想に於いて、サルトルやフーコーのような大思想家やベルナルド・リヴィエラ、メデア知識人と